文
アクセル・コルティ
写真
クリスチャン・カイン

ユーモラスで、陽気で、エレガント。でも、ちょっとふざけていて、調子外れで、率直に言って実用性はゼロ。ティエリー・バルビエ-ミュラーの椅子コレクションは、60年にわたる大胆不敵な創造を体現する個性が、一堂に会したギャラリーのようだ。ジュネーブを拠点とした、今は亡きその企業家は、代々続くコレクターの家系を代表する人物にふさわしく、椅子に対する鋭い感性を培った。彼は同時代のアートやデザインをこよなく愛し、その収集欲には限りがなかったが、購入には慎重だった。現在は、彼の娘たちが、敬意と愛情を持って家族の遺産を受け継いでいる。マリー、バレンタイン、ゾーイ、ソフィ、イネスの5姉妹が、家具と彫刻、アートとデザインの垣根を越える斬新なコレクションを遺した先駆者である父の思い出を語る。

ブルーノ・ムナーリが1945年に着想を得た「束の間の訪問のための椅子」は、伝統的な椅子のデザインに急傾斜した座面を組み合わせたユーモラスな作品。写真は1998年に製造されたもの（エディション3/9）で、素材はワックス仕上げのウォールナット材、木象嵌、アルミニウム。高さ105センチ。

お父様が収集に興味を持つようになったのは、家族の影響や導きがあったからでしょうか。

収集は、私たちの曽祖父であるヨーゼフ・ミュラーとその妹ゲルトルート・デュビ・ミュラーから続く家族の伝統です。祖父母のモニクとジャン・ポール・バルビエ・ミュラーがそれを引き継ぎ、私たちの父とふたりの伯父もその伝統にどっぷりと身を浸しました。特に奨励されて収集を始めたわけではないようですが、彼らの美術品との向き合い方は、間違いなく先祖代々受け継いだものです。叔父たちと同様に、父もまた、アートを刺激に満ちた発見の場ととらえ、常識や制約にとらわれず、大胆かつ情熱的にアートを探求し続けました。

お父様が椅子を収集するようになったきっかけは？

独創的な家具に囲まれて暮らしたい、というシンプルな思いがはじめにあったようです。「もともとコレクションをしようなんて考えていなかった。最初の一脚は、これは絶対買わなくてはという思いで購入し、そこからもう一脚、さらにもう一脚と。撚った糸をほぐすように、はじめは好奇心と警戒心が半々で少しずつ、それが加速度的にペースアップして、迷いなく買いまくるようになっていた」と言っていましたから、意識的に収集を始めたわけではないのでしょう。父は、コレクターなら誰しも経験する、自分には抗えない大きな力、神秘的ともいえる衝動のことを言っていたのだと思います。最初に本能と直感が支配する世界。その意味で、父は基本的に、自分のなかで感情やアイデアを喚起してくれる、美的かつ精神的な高揚感をもたらしてくれる作品を集めていました。父にとって椅子は、単に評価するものではなく、個人的な発見を促す自由な表現形式であり、作品の素材やサイズ、機能が生み出す可能性に魅力を感じていたのです。

コレクションはお父様の人物像を反映していますか。

もちろんです。父は、繊細な感性と深い精神性、そして並外れた知的探求心と熱意を持ち合わせていました。だからこそ、父が集めた363人のデザイナー、アーティスト、建築家による650脚を超す椅子のコレクションは多岐にわたり、色合いと彩りに富んだものとなっているのです。父の収集のアプローチは、体系的でも学術的でもなく、全く型破りなものでした。有名なものも、まだあまり知られていないものも、形式的にも概念的にも多彩な作品を幅広く集めていました。好奇心の赴くまま、時には衝動的に、リスキーな買い物もいとわない父のコレクションの流儀は、私たちにとって驚きの連続だったのです。

椅子の多くは1960年以降のものですよね？

父は同時代のアーティストに自然と親近感を抱いていて、彼らの作品を中心に集めていました。

［前見開きページ］
イギリスのデザイナー、トム・ディクソンによる「実験的な椅子のデザイン」（高さ90センチ、スチール製）のプロトタイプ（1980年制作）。
［当ページ］
（右上）影響力のある建築家とデザイナーの集団「Team 10」のメンバー、ステファン・ヴェヴェルカ（1928～2013年）による「クラッセンラウムシュトゥール」（1971年、エディション17/40、高さ70センチ）。赤くラッカー塗装した木材を使用している。
（左上）アレッサンドロ・グエリエロの「ポストステルトマン」（2000年頃、高さ70センチ）。非伝統的な素材、着色アクリルガラスを用いたユニークな作品の好例だ。グエリエロは1976年にミラノで妹のアドリアナとポストラディカルな前衛デザイン集団「スタジオ・アルキミア」を設立している。
（下）チェ・ビョンフンが2001年に発表した「アフターイメージ01-105」（高さ98センチ）は、重力と戯れるユニークな作品。黒いステンレススチールと合成皮革でつくられた、この椅子には脚がなく、花崗岩の重さで座る人の体重と均衡を保つ。

PHOTOGRAPHS: PATRICK GOETELEN/COURTESY OF THE BARBIER-MUELLER MUSEUM/DACS 2024

［前ページ］
2007年にスイスのデザインスタジオBIG-GAMEがデザインし、フランスのムスタッシュ社が製造した「ボールド・チェア」（エディション7/100、高さ76センチ）。ウレタンフォームとスチールチューブの骨格を、着脱交換可能な靴下のようなポリエステル製スリーブが覆っている。
［当ページ］
（右）1988年にトム・ディクソンがデザインした「クラウン・チェア」（高さ103センチ、60脚限定）は、金メッキを施した溶接鋼板製。流行のスタイルを無視し、イギリス流のデザインの斬新さを復活させようとするディクソンの信念が見られる。「私は、流行に左右されず、長く使えるデザインを心がけています」と、彼は語っている。（中）イタリアのデザイナー、アレッサンドロ・メンディーニ（1931～2019年）の、卓にもなる椅子（1984年、ラッカー塗装した木材と革製、高さ136.5センチ）。ザノッタ社のZabroコレクションの一点で、イタリアの伝統的な美術工芸品から発想を得ている。（左）ロン・アラッドによる「ナロー・バッバルデッレ」（1992年、エディション10/20、クロムメタルとステンレススチール・メッシュ製、高さ107センチ）。

特に、まだ世間に認められていない作品を自分の目で見極めるのが好きでしたね。

お父様のお気に入りの椅子は？

父は椅子を一つひとつ自分で選び、その作品にしかない長所を高く評価していました。特に、プロトタイプのものが好きでしたね（56～57ページの「実験的な椅子のデザイン」を参照）。プロトタイプは創作活動における最も純粋な表現であり、そこにはリスクが伴うと、父は考えていました。コレクションのなかに、ポル・クアデンスやロバート・ウィルソン、ロン・アラッド、トム・ディクソンといった特定の作家の作品が多く含まれているのは、父が彼らの椅子を高く評価していた証です。父は、自分が好きなアーティストだけでなく、単純に面白いと思った作家の作品も徹底的に集めました。先に挙げたデザイナーの一部がコレクションの原点の鍵であり、そこから1990年代にクリエイティブ・サルベージ運動に魅了された父は、家具、特に椅子に興味を持ち始めたのです。

2022年から2023年に、スイスのローザンヌにある現代デザイン応用芸術美術館（mudac）で開催した「椅子とあなた」展で、初めてコレクションを公開したのはなぜですか。

父にとって、収集はきわめて個人的な行為だったので、長い間、限られた人にしか収集品を見せませんでした。ところが、当時mudacの館長を務めていたシャンタル・プロドムが、父のコレクションの展示を企画し、彼女の真摯な情熱や心温かさが父を動かしたのです。こうした美術展には特別な舞台美術が必要で、それを任せられるのはアメリカの舞台演出家ロバート・ウィルソンしかいないと、意見が一致しました。椅子が持つ彫刻としての可能性や、椅子という日用品を美的に探究する作家の自由な活動に父が興味を抱いていることを、ボブ（ロバートの略称）は理解していました。父が重い腰を上げて彼に話を持ちかけるまで1年近くかかったのですが、彼はたった半日で承諾してくれました。この冒険を通して、父は自分にとって居心地のよい場所から一歩外に踏み出すようになりました。それは、父の著書『椅子の精神（原題：The Spirit of Chairs）』に記された次の言葉からも明らかです。「この数年で学んだことがある。自分以外の美術愛好家や熱狂的な美術ファンと誠実に純粋に分かち合うことは、不遜でも世俗的な虚栄心に満ちた行為でもなく、むしろそうすることで、私が守ろうとする美術品に命が吹き込まれる。そして、このような交流を通して生まれる共鳴が、結局は私の人生を豊かにしてくれるということを」。

展覧会を続けることで、お父様のレガシーを讃え続けることができますね？

私たちにとって、父を偲び、コレクションを存続させることは、とても大切なことです。父が亡くなってすぐ、ライプツィヒのグラッシィ工芸美術館での展覧会が決まりました。これは、父にとって非常に大きな意味を持つことで、私たちはとても感激しました。ボブと彼のチーム、そしてシャンタル・プロドム、シャルロット・サヴォライネン・メイラー（コレクションのキュレーター）の尽力によって、この大がかりな演出は、将来的にさまざまな場所での公開を視野に入れながら、新たな会場に向けて練り上げられました。この第2弾となるドイツでの展示後も、同展をさらに幅広い層に見ていただけるよう、私たちは取り組んでいます。2025年には、スイスのヴヴェイにあるイエニッシュ美術館とのコラボレーションが控えています。これは特に重要なプロジェクトで、今からとても楽しみにしています。この展覧会では、父が情熱を注いで収集したもうひとつのコレクションである、紙をプラットフォームとした美術作品が展示されます。

THE DAUGHTERS OF THIERRY BARBIER-MUELLER WOULD LIKE TO WARMLY THANK CHARLOTTE SAVOLAINEN-MAILLER AND CLARISSE COLLARD (FORMER CURATOR OF THE COLLECTION) FOR THEIR VALUABLE CONTRIBUTIONS AND REFLECTIONS ON THIS INTERVIEW

オーナー・エリア「マガジン・エキストラ」にて、この記事の関連コンテンツを掲載しています。QRコードから、ぜひご覧ください。patek.com/ja/オーナー